『羊をめぐる冒険』論

――北海道から満州、そして戦後――

松枝　誠

はじめに

村上春樹の初の長編小説となる『羊をめぐる冒険』（「群像」）は、一九八二年八月に発表された。著者自身の言葉によれば、それ以前の作品である『風の歌を聴け』（「群像」一九七九年六月）、『一九七三年のピンボール』（「群像」一九八〇年三月）に対し、「物語を語る方向」、つまり「ストーリー・テリング」の手法を用いた最初の作品となる。[1]

多数の先行研究が示すように、この小説において最大の謎となるのは、題名にも示される、〈羊〉とは何かという問題である。これまで多くの論者は、それを抽象的な「何らかの〈観念〉」[2]とし、〈羊〉の追求自体が「象徴解読のゲーム」[3]とみなされてきた。村上自身も〈羊〉を作品の「キー・ワード」とするものの、それに確定された「意味」を付与することはなく、その象徴するものに関しても、自らが解答を与えることはない。

しかし、〈羊〉という言葉に着目した際、多数の文学作品において、それが被支配者を名付ける際に使用され、それを用いることで支配者側を批判してきたことが指摘できる。江馬修は『羊の怒る時』（一九二四年十月、聚芳閣）の中で、関東大震災に際して日本人によって虐殺された朝鮮人を「羊」と呼び、日本人の中に潜む不断の「人種的偏見」を描き出した。さらに戦後では、高見順、杉浦明平は戦前から連続する「恐怖政治」、あるいは権力によって、従順であることを強いられる日本人を「子羊」と呼び、占領下にある日本を批判した。[4]前者が朝鮮人を、後者が日本人を「羊」と呼ぶことからも、批判する対象はそれぞれに異なるものの、「羊」という言葉は、支配／被支配という二分的な構図を想起させるものとして使用されてきた。

村上が前作で作品タイトルを引用した大江健三郎の短編小説「人間の羊」（「新潮」一九五八年二月）でも、そうした二分的な支配／被支配関係の中に〈羊〉が存在しているように思われる。作中では、偶然バスに乗り合わせた「郊外のキャンプへ帰る」

「外國兵」によって、屈辱的な目にあい、彼らが陵辱し、笑いながら歌う歌（「羊撃ち、羊撃ち、パン　パン」）によって、《羊》となった「日本人」の姿が描かれている。

僕が首筋を掴まえられて正面へ向きなおらされた時、バスの中央の通路には、振動に耐えるために足を擴げてふんばり、裸の尻を剥きだして背を屈めた《羊たち》が並んでいた。僕は彼らの列の最後に連なる《羊》だった。

ここで、《羊》であることとは、「外國兵」に対し抵抗の言葉を発せられない状態を指している。「僕」が陵辱される契機となる、「外國兵」に連れられた「女」との諍いを詰め寄られる際から、「僕」の声は「喉にこびりついてうまく出てこ」ず、彼らが立ち去るまで「僕」は結局一言も声を発することができない。

作品内で具体的な年代、場所等が記されることはないが、「人間の羊」は、アメリカ占領期の日本を舞台とした作品であるといえる。そこには、占領軍＝支配者によって陵辱され、抵抗することができず、《羊》となった「日本人」＝被支配者という図式が浮かび上がる。

しかし、マイク・モラスキーが指摘するように、「人間の羊」は単純にこうした支配／被支配関係のみを描いているわけではない。モラスキーは、作品が「占領者と被占領者の関係を描くことで始まったにもかかわらず」、「その関係がいかに被占領者たち自身の世界に移し替えられているか、という問題」を提出していることを指摘する。[3]

「外國兵」が立ち去った後、《羊たち》は「外國兵」による屈辱から解放されるものの、《羊》になることはなかったバスの「日本人」乗客に警察に訴えるように詰め寄られる。そこで黙り込んでしまった《羊たち》は、「不意の唖」となる。一人の《羊》による暴力で《羊たち》は彼らから解放されるが、「僕」のみは、降車後もしつこく詰め寄る教員に「犠牲の羊」となるように諭され、交番に連れられる。しかし、それでも声を発することのない「僕」に、その教員は「外國兵」と共に「恥をかかせてやる」ことを宣告する。

ここでは「被占領者」である「日本人」としての連帯感ゆえに生じる、《羊》と《羊》とならなかった者たちの断絶が描かれている。《羊》となった者は、彼らの言葉にも「暴力」を感じ、「不意の唖」とならざるを得ない。同じ「日本人」の間にも直接暴力を蒙った者と、それを黙認していた者の間には非対称な関係が形成されている。そこで、後者が前者を「犠牲の羊」とすることとは、その非対称な関係の再生産に他ならない。

つまり、被占領者である「日本人」は、占領者から直接的な被害を受ける可能性を持つという意味で、すべて《羊》であるといえるが、その被害は「日本人」の内部でも差異化され、さらにその中で支配／被支配関係が再生産されているのである。

小説内では、こうした「外國兵」／「日本人」という不可能な枠組にも包括されない人物も描かれている。それは日本語を話すにもかかわらず、自らを「東洋人」と名乗る「女」である。この

「女」はモラスキーが述べるように、「バスの乗客の誰よりも、兵隊たちの手による完全な横暴を被」るものの、バスの乗客を含め、誰からも手を差し伸べられることはない。

大江はこの作品を発表した翌年、敗戦後の日本では進駐軍に対し、「屈辱の感情」もなく《ハロー》と呼びかけ、「抵抗運動」を行うこともなかったことを「恥ずかしい記憶」と述べ、しかし同時に、日本がアジア諸国に対しては、同様に振る舞ったことを指摘している。[6]

そして、白人に制圧されればにこにこして《ハロー》と追従し、おなじ黄色人種の仲間にたいしては、冷たく意地悪にとりすます傾向、このいくぶん女性的な傾向は、日本の経済のみならず文化をも毒しているのである。

大江が戦後日本のこうした状況を「女性的」とするところには躓かねばならないが、「人間の羊」における「女」は、この「女性的な傾向」には決して当てはまる人物ではない。彼女は「外國兵」に対しては一人日本語で怒声を発し、《羊》となった「僕」に対し、「あんた、もう止しなよ」と呼びかける。もちろん「僕」がそれに応えることはない。

つまり「人間の羊」における《羊》とは、「外國兵」と「東洋人」との間に存在する「日本人」の姿を象徴したものであるといえる。それは占領下に一方的に支配される被支配者の姿ではなく、アメリカに対しては《羊》であることを主張しながら、「東洋人」に対しては《羊》であることを拒絶し、逆に支配者であることを誇示するのである。

〈羊〉という言葉がこうした文学的記憶を想起させることを勘案すれば、『羊をめぐる冒険』が提起する〈羊〉とは何かという問題を、単に「象徴解読のゲーム」として退けることはできないであろう。それは「日本人」が他者、あるいは自己を表象し、批判する手段として幾度となく利用してきた言葉であるからだ。そこでは必然的に「日本人」をめぐる支配／被支配の問題が問われるであろう。特に作中で〈羊〉は、北海道開拓、満蒙開拓といった日本の植民地経営に直接関与し、それは歴史的事実とも合致する。つまり『羊をめぐる冒険』が提起する〈羊〉とは何かという問題は、日本の植民地支配を問うことに他ならない。そして作品は、それが現在まで継続される問題であることも提起している。本論では以上のような視点に基づき、〈羊〉とは何かという問題を考察していく。

一

まず、作中時間で最初に〈羊〉について言及する町史『十二滝町の歴史』（昭和四十五年五月発行）について考察する。羊が登場するのは、明治三十五年（一九〇二）年のことである。

明治三十五年には村のすぐ近くにある台地が牧草地として適していることがわかり、そこに村営の緬羊牧場が作られた。〈中略〉次いで川沿いの道が囚人工夫によって整備され、や

がて政府からただ同然の値段で払い下げられた羊の群れがその道を辿ってやってきた。(下79)

この町(村)は津軽から移民した貧農が借金から逃れるために、北海道の未開の奥地に明治十三(一八八〇)年以降、長年に渡る自然との格闘の末に開拓した町である。しかし、こうした小説内で描かれる開拓物語は、現実の北海道開拓史と照らし合わせると、以下の二点から事実に基づいた物語とは言えない。当時に「募集移民」ではなく、「自移農夫」として北海道に渡り、自ら開拓を行った点。後述するが、アイヌと日本人が共生し、さらに八年もの間国家に回収されない開拓地を建設・経営した点である。こうしたことから、モデルとなった実在の町を考えることは難しい。川村湊は、この町のモデルを鉄道の終着駅ということから、「仁宇布」あるいは「北見滝ノ上」辺りという見当をつけているが、[7]開拓当初の十二滝町とは、まさしく川村が述べるところの「幻影と虚栄の街」としての〈新世界〉であったとするのが適当である。[8]そしてそのため、『十二滝町の歴史』には描かれることのない歴史の暗部が隠蔽されることになる。それが開拓民を十二滝町へと導いたアイヌ青年と「日本人」開拓民との関係である。

アイヌ青年は、開拓民の道案内として「札幌の近く」のアイヌ部落で雇われた人物であり、借金取りから逃れるために奥地へと進む開拓民の「その不可解な宿命性にすっかり同化」し、「おそらく好奇心のため」開拓地に留まることになる。この青年の北海道での生活能力によって開拓は進行し、開拓民の娘とも結婚して、三人の子供をもうける。さらには、自ら「月の満ち欠け」という意味を持つアイヌ名から日本名へと改名し、「日本人」となったように描かれている。

ここで注意すべきは、もちろん様々な開拓に関する紆余曲折は描かれるものの、『十二滝町の歴史』には、アイヌ青年が日本人へと「同化」していく際に必然的に伴うはずの恐怖、暴力が、まったく描かれていない点である。彼は開拓民の中心となって開拓を行い、自ら望んで「日本人」となる。

当時のアイヌの日本人への同化政策は、明治二(一八六九)年に開拓使が設置され、「蝦夷地」から「北海道」へと改称されて以来、着実に国家政策として強固な形で実施されていた。[9]明治四年十月には、アイヌに対して農耕を奨励し、女子の入れ墨、男子の耳輪といった旧慣の禁止を行い、さらには日本語の使用を奨励する布達が出された。[10]また同年、明治政府による戸籍法が交付された後、明治九年には、ほぼ全道のアイヌが「創氏改名」を強いられ、「平民」とされている。こうした同化政策は、ロシアの脅威に対し、北海道を日本の領土として確保するという目的に基づいて行われた。そのため、アイヌは平民として日本人と同じ法体系に組みこまれるものの、日常的な差別は継続・増幅され、さらにそれまでの特殊権益であった、鮭・鹿の捕獲の制限・禁止が行われるなどして、生活基盤は急激に悪化した。[11]そして、こうした政策によって急激に貧困化したアイヌを「保護」するという観点から、明治二十六(一八九三)年には「北海道土人保護法案」が

帝国議会に初めて提出され、明治三十二年には「北海道旧土人保護法」が制定・施工されている。

『十二滝町の歴史』における津軽の開拓移民がアイヌ青年を雇うことになる一昨年の明治十一年、北海道を訪れたイザベラ・バードはアイヌの日本人に対する様子を次のように記している。[12]

人々は、明らかに何事かを待ちあぐんでいた。彼らは日本政府に対して奇妙な恐怖—私にはばかばかしい恐怖と思われるのだが—を抱いている。〈中略〉彼らの一人は、私がヘボン先生に頼んで彼の子どものために薬を送ってもらってやる、と言ったので、私にとても感謝していたのであるが、今朝私のところにやって来て、どうかそんなことはしてくれるな、と頼んだ。「日本政府はきっと怒るだろう」からだという。

バードはアイヌの日本政府に対する「恐怖」を「ばかばかしい恐怖」と一蹴し、日本政府の「好意」、「人道」性を述べるが、ここで思考すべきことは、実際にふるわれた暴力に対する「恐怖」ではなく、アイヌにトラウマのように潜在化する「恐怖」である。

さらに、その翌年の明治十二年、「札幌の近く」のアイヌ部落である札幌群対雁村では、明治九年に樺太から強制移住させられたアイヌの間でコレラが大流行し、罹病者七十名、死者三十名の大被害がもたらされている。[13]

こうした当時のアイヌに対する同化政策、アイヌと日本人との非対称的な関係を見る限り、「日本人」である開拓民に同行することになったアイヌ青年は「暴力の予感」に、「身構えて」いた存在であると述べることができるだろう。[14]

しかし、『十二滝町の歴史』にはこうしたアイヌ青年の身振りが描かれることはなく、アイヌ青年の視点そのものが欠けている。サイードが述べるように、「〈始まりとは意味の意図的生成の第一歩である〉[15]」とすれば、十二滝町生まれの郷土史家である著者によって執筆されたこの町史は、十二滝町の〈始まり〉をアイヌと日本人が平和に共生していた場所として描くことによって、自らの祖先である「日本人」開拓民を被害者としてのみ捉え、全く無垢な存在として描いている。それは、当時「日本人」がアイヌに行使していた暴力を描かずに隠蔽することであり、『十二滝町の歴史』そのものが、現在において暴力を発生させる装置となっていることを示しているといえるだろう。

しかし、こうした『十二滝町の歴史』における歴史の隠蔽は、著者自身の言葉によって町史に書き込まれ、その読者である「僕」はその隠蔽にすでに気づいている。

・「アイヌ青年は—論者注]目の暗い、やせた青年で、アイヌ語で「月の満ち欠け」という意味の名前を持っていた。(たぶん躁鬱症の傾向があったのではないかと著者は推察している。)(下72)

・理由はよくわからないが、アイヌの青年は生まれ故郷には帰らず、そのまま開拓民たちとともにその土地に留まった。おそらく好奇心のためであろうと著者は推察していた。(著者は実にしばしば推察していた。)(下75)

アイヌ青年が「目の暗い、やせた青年」であったことは、それまでの過酷な住環境、さらには「日本人」開拓民との非対称な関係等が原因とも考えられるが、著者は彼個人の疾病をその原因とする。また、アイヌ青年が開拓民とともに開拓地にとどまることは、アイヌ青年自身も「日本」という国家に介入されない土地を求めていたためかもしれないが、ここでも著者は、彼が開拓民に対し好意的であったことをその原因とする。このようにアイヌ青年を『十二滝町の歴史』にとって、友好的な人物に位置付けようとすれば、著者の「推察」が介在せざるを得ず、それは読者である「僕」にとっての躓きとならざるを得ない。

つまり、十二滝町の〈始まり〉を表わす町史にアイヌ青年を登場させ、さらにその姿を描こうとすれば、著者の意向が反映されざるを得ない。そして、その痕跡がテクスト上に残されることによって、読者は『十二滝町の歴史』には決して描かれることのない別の「歴史」を想起することになる。言いかえると、ここで『十二滝町の歴史』が示すものは、著者が「客観的」な「歴史」というものを描くこと、また、読者がそれを想起することの不可能性であるといえる。しかし、同時に、読者がその町史に疑問を抱き、それを批判的に読むことによって〈歴史〉の可能性が開かれることも示していると言えるだろう。

二

『十二滝町の歴史』において、開拓以来どこの国にも属さない場所であった開拓地は、明治二十一（一八八八）年の道庁の役人による戸籍調査の際に、正式に「十二滝部落」と名付けられ[16]、日本の領土へと包摂されることになる。それに合わせ、「納税」・「徴兵」も行われるようになり、開拓地は〈新世界〉という「幻影と虚栄の街」から、近代化する日本の一部落へと変化することになる。つまり、架空の場所として描かれていた開拓地は、国家の介入を受け入れることにより、現実の部落へと変貌したといえる。この変化を敏感に感じ取ったのが、既に日本人へと「同化」していたアイヌ青年であった。

> もちろん不快な出来事もないではない。役人がしばしば姿を見せ、税の徴収と徴兵を行うようになった。それをとくに不快に感じたのはアイヌの青年だった。彼には納税や徴兵の必要性がどうしても理解できなかったのだ。／「どうも昔の方が良かったような気がするな」と彼は言った。（下79）

ここで彼の述べる「昔」とは、架空の〈新世界〉を指し、前章で指摘した著者のノスタルジックな志向が透けて見える[17]。しかし、ここで注目すべきは、アイヌと日本人が共生していたと呼べる開拓地に国家が介入することにより、〈新世界〉が消滅し、暴力が顕在化されようとする点である。そして、その暴力を感じ取るのは、「日本人」開拓民ではなく、アイヌ青年であったという点で

ある。つまり、『十二滝町の歴史』でそれまで著者によって隠蔽されていた暴力は、国家の介入を機に顕在化することになり、その暴力を受ける客体は、日本人に「同化」したにもかかわらず、そこから決定的に排除されるアイヌ青年なのである。

そして、こうした架空の開拓地が日本の一地域へと劇的に転換し、さらにアイヌ青年に対する暴力が発現する契機となったのが、明治三十五年の政府による羊の移入である。この羊は「来るべき大陸進出」に備えての防寒用羊毛自給のため、という軍部の要請で支給された。それは津軽の貧農によって行われた「十二滝部落」開拓が、結果として、「日本人」による侵略でしかなかったこと、さらにはそのことが、直接に日本の大陸進出と結びつき、「十二滝部落」が戦場の兵站基地として塗り替えられていくことを示していたといえる。

ここで、実際に日本において羊が国策の一環として生産された歴史を見ていきたい。日本で本格的に緬羊事業が開始されたのは、明治七年八月にD・W・ジョーンズによって「本邦ニ於テ牧羊業ヲ開始スヘキ旨ノ意見書」が内務省に提出され、翌年五月大久保利通が「牧羊開始ノ義」を上請した時である。大久保はそこで開港以来の毛布需要の高まりを指摘し、「速ニ牧場ヲ開キ従テ毛布製造所ヲ設ケサルヘカラス」[18]と主張する。そして、同年九月には、自ら牧羊地を検分・選定し、千葉県下総に下総牧羊場を建設している。

川端俊一郎は明治初期の牧羊業の目的を、「産業立国による輸入防圧」、「俸禄士族を招撫順化するための帰農工作」という二点を挙げて説明している[19]。つまり、牧羊という新たな労働機会の創出が、「産業立国」としての「日本」という国家を創出・領有化し、さらにはその領有化した国内を平定化していたと述べることができる。

以上のように羊を捉えると、十二滝村への羊の移入に最も興味を示した人物がアイヌ青年であったことが注目できる。アイヌ青年は村への国家の介入による暴力を最も敏感に感じ得たものの、逆にそれゆえ、羊の導入に積極的に働きかけることになる。

アイヌ青年が羊飼いとなったのは、『十二滝町の歴史』では「たぶん人口増加に伴って急激に入り組み始めていた村の集団生活にうまく馴染めなかったのだろう」（㊦80）という理由で説明される。ここでも著者の「推察」が介在され、アイヌ青年が「うまく馴染めなかった」理由がそれ以上語られることはない。しかし、ここで町への「日本人」の大量流入により、「日本人」による「アイヌ」の差別、それに伴う暴力が顕在化したことを想起することは容易であろう。アイヌ青年が、国家による牧羊政策に参加することは、すでに日本名を名乗り「同化」していた「アイヌ」が、国家の供給する労働に自主的に携わることにより、さらに正式な「日本人」となるための契機となったと考えられる。

しかし、この羊毛自給政策とは、実際の戦争において強固な日本軍を創出し、戦争の最前線でその役割を担うことになるものであった。牧羊場同様、大久保によって考案された日本国内の最初

の羊毛工場である千住製絨工場（一八七九年創業）を創設する際には、後に大倉財閥を築くことになる大倉喜八郎が大久保に次のような進言を行っている。

現在我日本の兵隊は御承知之如く肌に木綿の莫大小に着其上に紋羽の襦袢を重ね夫れから表が紺地の小倉裏が紋羽の「チヨツキ」と上着とに同様のズボンを穿いて居ります為め行軍中に雨に逢へば湿布肌に染み通つて不快の感到底堪へられませぬ苟も国家の干城たる軍隊の服を今後羅紗服に代へなければならぬ事と存します夫故私は羅紗は日本で織れるものであるか否や仮令完全な羅紗は急に織り出せぬとしてもせめては毛布位は織れそうなもので夫れより段々羅紗を織ッて兵隊服改良の途を開きたい[20]

アイヌ青年はその後、日露戦争に長男が出征し、羊毛の軍用外套を着て戦死したことを知らされることで、自らが積極的に国家の戦争に加担していたこと、つまりは長男の戦死に加担していたことを知ることになる。そして村を離れ、羊とともに孤独な死を迎える。

アイヌ青年は、自らに行使される暴力を回避するために、「日本人」になろうとし、そのために羊の飼育・増産という国家の労働を自主的に担うことになった。しかし、それにより、彼は戦争に加担し、間接的に戦場で暴力をふるい、逆に自らに暴力を行使することになる。つまり、ここで描かれるのは、国家に包摂される（＝「日本人」になる）ことにより、暴力の加害者にもなり、最終的には被害者になるアイヌの姿であると言える。

〈新世界〉への日本・日本人の進出は、北海道への進出以降、一八九五年の台湾領有、一九一〇年の韓国併合と続き、一九三二年「満州国」建国後は、「王道楽土」「五族協和」といった言葉で粉飾され、満州移民政策という形で継続されていく。[21] 村上は本作品が発表される以前、一九八二年五月に「都市小説の成立と展開」というエッセイにおいて、「加藤完治の満蒙開拓論」を例に挙げ、「人が拡大に向う時、そこには必ず農耕幻想が持ち出される」と述べている。そして、それが「幻想」である理由を「国家は国家の論理を超えた各個人のアイデンティフィケーションを絶対に許しはしない」からだとする。[22] ここでの村上の言葉を換言すれば、北海道開拓、満蒙開拓は国家政策に過ぎず、〈新世界〉、「王道楽土」は「幻想」にすぎない。しかし、その「幻想」によって、人は主体的に「拡大」を行うのである。『十二滝町の歴史』の中でも、北海道開拓の延長上に満蒙開拓が位置付けられている。

耕地は限界に達し、零細農民の息子たちの中には満州や樺太に新天地を求めて町を出ていくものも現われるようになった。（下82）

津軽の貧農による北海道開拓が、貧困から逃れるために行ったものであったことと同様に、「零細農民の息子たち」の「新天地」への進出も彼ら自身の貧困の為に積極的に行われたものである。しかし、「新天地」とは「幻想」にすぎず、彼らの進出は「新天地」の住民にとっては侵略でしかない。

そして彼ら満州移民同様に、羊も大陸進出を果たすことになる。一九三四年、羊博士は「陸軍の若い将官」によって「中国大陸北部における軍の大規模な展開に向けて羊毛の自給自足体制」の確立を依頼され、翌年には「日満蒙緬羊三百万頭計画」のために満州へ赴き、現地視察を行っている。[23]

つまり、『羊をめぐる冒険』に描かれる羊とは、「幻想」としての〈新世界〉と呼ばれる差別の存在しない「日本人」の領土を作り出す装置であったといえる。それゆえ、その領土には「他者」が存在することはなく、そこでの労働は「日本人」によって主体的に担われることになる。そして彼らは、先住民であるアイヌや他国民を隠蔽・排除しながら、結果として、積極的に日本の北海道・大陸進出に加担したのである。

三

明治以降、積極的に国家政策として取り挙げられた緬羊は、戦後は各農家による衣料供給の面で注目され、一九五七年に飼育頭数がピークを迎えるものの、輸入羊毛の急増により、羊毛生産を担う緬羊はほとんど見られなくなる。[24]

作中でも黒服の秘書により、「羊は国家レベルで米国から日本に輸入され、育成され、そして見捨てられた」（㊤176）とされ、耳のモデルである「僕」の彼女によっても、戦後（一九四七年）から現在（一九七八年）にかけての羊の飼育頭数が、二十七万頭から五千頭へと急減したことが強調される（㊤209）。つまり、戦後になっての羊とは、北海道で調査した彼女が述べるように、「もう見放された動物」（㊦27）に他ならない。

しかし、作品では戦前から現在にまで引き続き羊は登場する。それが「背中に星の印がついた」、「意志」としての「羊」である。

この「羊」は、前章で述べた「日満蒙緬羊三百万頭計画」を企図していた羊博士に一時的に入り込んだ後、日本へ渡り、獄中の右翼青年に入りこむ。出獄後、この右翼青年は右翼の大物となり、中国大陸で情報網と財産を築き、戦前には「亜細亜主義者」として本にも紹介されている（㊦175）。そして戦後はA級戦犯となるが釈放され、その後、政治・経済・情報の暗部を掌握することになる。

前章で述べた日本の先兵となり大陸に進出した羊と同じように、「羊」は中国大陸で暗躍し、力を得る。しかし、「羊」が羊と異なる点は、「羊」は戦後も日本に潜在し続け、「政界、財界、マス・コミュニケーション、官僚組織、文化、その他君には想像もつかないようなものまでとりこんでいる」（㊤187）点である。つまり、はっきり目に見える羊は戦後見捨てられるものの、「意志」としての「羊」は、戦後も連綿と存在し続けていると述べることができる。

柄谷行人は、この「羊」が属する領域を「アジアと民権という軸に存在する「暴力」の領域」と述べている。[25] つまりそれは、

「日本がアジアの中の一国でありながら、植民地化を免れるために急激な西洋化を目指し、さらに独立した地位を得るとともに、西洋列強と並んでアジアに向かって帝国主義的に侵略していくという矛盾」として示される領域を指す。そして、戦後の言説空間において、「羊」が属する領域（「アジア主義（「第Ⅲ象限」）」）は、「実際には、日本は戦前以上にアジアに入り経済的な支配を広げている」ものの、禁止され、「〝意識下〟」におかれたと指摘する。[26]

柄谷が述べるように、戦後に「〝意識下〟」におかれた「羊」は、「地下の王国」を築き上げ、「国家という巨大な船の船底を一人で支配している」（㊤187）。坪井秀人は、この「羊」に入り込まれた右翼の大物を、児玉誉士夫がモデル[27]であり、その作中の形象が「戦後日本の構造的な権力の一元化を胡散臭いまでに表象化している」[28]と述べている。しかし、「意志」としての「羊」に着目すれば、児玉がモデルとされたのは、「「高度成長」の深層構造としての、「ひきのばされた大東亜戦争」[29]に対する批判であったといえる。つまりそれは、戦前から連続される大陸進出の「意志」としての「羊」であるといえる。それは、右翼の大物一人の欲望として語られるものではなく、津軽の貧農、アイヌ青年、あるいは満州移民が示すように、「日本人」となることにより、「日本人」が結果的に主体的に担うものといえる。現在彼らを反復するのは、「自由意志」（㊦181）によって黒服の秘書に「羊」を引き継がせることに結果的に協力していた「僕」である。このとき、戦後の「日本」という共同体にとって、排除の対象となるのは、羊博士であり、さらには羊男である。

羊博士は、「羊抜け」した後には農林省を辞し、羊飼いとなり、戦後は北海道緬羊会館を建て替えた「いるかホテル」の緬羊資料室に羊の資料と共にうずもれている。いわば羊博士は、戦前は羊のアジアへの進出、つまりは日本の大陸進出を直接的にもくろんだ人物であり、それゆえに戦後は隠蔽されざるを得ない人物となった。

それに対し、羊男は十二滝町の生まれでありながら、兵役を忌避することによって、自らの居場所を失い、戦後も森の中をさまよい続けることになる。

「どうしてここに隠れて住むようになったの？」／〈中略〉「戦争に行きたくなかったからさ」〈中略〉／「どこの国との戦争？」と僕は訪ねてみた。／「知らないよ」羊男はこんこんと咳をした。「でも戦争に行きたくないんだ。だから羊のままでいるんだよ。羊のままでここから動けないんだ」（㊦171）

羊男はその外見が示すように、羊でありながら、「羊」であることを拒否することにより、大陸進出の先兵となることを拒否しているといえる。しかし、それゆえに戦時中から現在まで国家に属することのない人物とならざるを得ない。そしてここで注意すべきは、羊男が戦争は現在も継続されていると感じていることである。つまり、アジア主義的な「意志」の存在を感じ取っている点である。羊男はこうした暴力に敏感であるが故に、隠蔽されざる

を得ない人物であるといえる。

先述したように、羊博士は戦時中の日本の大陸進出を企図し、それゆえ、戦後はその責任ゆえに隠蔽されざるを得ない人物となる。しかし、羊博士が隠蔽されるのは、羊男が示したように、戦後も日本の大陸進出の「意志」が継続されているからである。羊男はこうした日本の「意志」に加担することを拒否するために、「羊」としての「意志」を持たない羊となる。つまり羊男は、「国家」に包摂されざるを得ない「各個人のアイデンティフィケーション」そのものを捨て去ることによって、「日本」という国家から逃れてゆくのだ。

結論

『羊をめぐる冒険』における羊、「意志」としての「羊」とは、「日本」という国家を成立、継続させ、さらにそれを拡張させるための動力となる存在であったと言えるであろう。それは作品内で終始希求されつづけ、アイヌ青年、羊博士、右翼の大物、黒服の秘書、さらには「僕」も、それぞれがこの羊、「羊」に魅了され、意識的、無意識的に関わらず、「日本」という国家の拡張、継続に力を貸したのだといえる。ここで上記の五者の間に差異を見ることは当然であり、特にアイヌ青年における羊への関わり方は、二章で述べたように、非常に屈折したものとなっている。しかし、そうであるが故に、ここで問わねばならないのは、「羊」の「意志」が持つ希求力そのものであり、つまり「日本」という国家の存在そのものである。

前章で指摘した羊男は五者と比較した際、「羊」であることを拒否することにより、つまり「日本」という国家に帰属しないことで、国家による暴力の加害者にも、被害者にもなることを拒絶する。しかし、小説が示すのは、羊男がこうして国家から逃れ、徴兵忌避を行なうことによって、自らの居場所すら無くすということに他ならない。

この羊男と同様に、「羊」としての「意志」を拒絶する人物が、「鼠」である。「羊」は、右翼の大物の体を離れた後、「鼠」に入り込み、右翼の大物の亡き後の強大な権力機構、「あらゆる対立が一体化する」「アナーキーな観念の王国」を「鼠」に引き継がせようとする。しかし、「鼠」は自分の「弱さ」への執着によって、それを拒否する（下204）。そして、「羊」の「意志」を呑み込んだまま、「羊」に支配されることなく縊死する。ここで「鼠」のいう「弱さ」とは、羊男が示した徴兵忌避という姿勢であると述べることができる。「鼠」は、戦後にも継続される「羊」としての「意志」を感じたが故に、それに抗したのだといえる。そして羊男同様に、「日本」という国家に属することを拒否するが故に、死を迎える。つまり、国家へ帰属し、「羊」の「意志」を希求することは、「自由意志」を失い、国家による暴力を行使する主体となることを示すが、それに抗い、国家に帰属しないでいると、自らの生存そのものが危うくなるのである。

しかし、「鼠」は自ら死を選択するという点で、羊男とは決定的な差異を持つ。それは、『羊をめぐる冒険』において、「自由意志」の可能性を探求する場、あるいは国家に抗する場を閉ざすことを意味しているのではないか。「鼠」の死は、彼個人の「羊」の「意志」の殺害には寄与したとはいえるが、それはきわめて個人的なものであった。そう捉えるなら、羊男は、継続される「日本」という国家の「意志」を批判することのできる小説内で唯一の存在といえるであろう。

しかし、『羊をめぐる冒険』の続編として発表された『ダンス・ダンス・ダンス』（講談社、一九八八年十月）では、羊男はその姿を消すことになる。さらに「いるかホテル」も消滅し、その跡形もなくなっている。これは羊博士によって辛うじて残されていた戦前の羊の記憶、さらには戦後も隠蔽されながらも継続されている、「羊」としての「意志」の内実を明かすものの消滅に違いない。それは戦後の空間が完全に国家と一体化し、国家を批判する視座・記憶が消滅したことを指している。

羊男の示した、国家によることのないアイデンティティの追求はいかに継承できるのか。それは、現在も継続する「日本」の「意志」を歴史的に探求し、批判することにしかないのではないか。

テキストは、講談社文庫版（一九八五年十月）による。
本文中（　）内はテキストの上・下及び、ページ数を示す。

注

（1）インタビュー「「物語」のための冒険」（「文学界」一九八五年八月）
（2）今井清人「羊をめぐる冒険」（『村上春樹　作品研究事典』鼎書房、二〇〇一年六月）
（3）マサオ・ミヨシ、佐復秀樹訳『オフ・センター』（平凡社、一九九六年三月）
（4）高見順『敗戦日記』（文藝春秋新社、一九五九年四月）、杉浦明平「子羊をねらう狼」（「新日本文学」一九五四年五月）
（5）マイク・モラスキー、鈴木直子訳『占領の記憶／記憶の占領』（青土社、二〇〇六年三月）
（6）大江健三郎「ハロー」（「週刊朝日」一九五九年二月八日）
（7）川村湊「『新世界』の終りとハート・ブレイク・ワンダーランド」（「ユリイカ」一九八九年六月臨時増刊号）
（8）他に「十二滝町」を「歴史的事実に反した夢物語」と指摘した論文として、山根由美恵「マイノリティーから見る歴史―村上春樹『羊をめぐる冒険』―」（「プロブレマティーク」二〇〇四年七月）が挙げられる。
（9）アイヌに対する同化政策の始まりは、一七九九年の蝦夷地の幕領化以降と言える。しかし、明治以降は国家政策によって「蝦夷地」が「内国」化し、アイヌが「帝国

臣民」へと編成されたことが指摘できる。（海保洋子『近代北方史』三一書房、一九九二年六月）

（10）『アイヌ史資料集　第二巻』（北海道出版企画センター、一九八一年八月）

（11）小熊英二『〈日本人〉の境界』（新曜社、一九九八年七月）

（12）イザベラ・バード、高梨健吉訳『日本奥地紀行』（平凡社、二〇〇〇年二月）

（13）これを単なる疫病による災害と捉えるだけではなく、「強制移住がもたらした生活様式の改造からくる必然的な結果」（上村英明『北の海の交易者たち』（同文館出版、一九九〇年六月））と捉える視点が不可欠である。

（14）富山一郎『暴力の予感』（岩波書店、二〇〇二年六月）「暴力に身をさらされ続けるプロセスにおいて生起する事態は、結果的に暴力が行使されたり、されなかったりするということにおいて表現されるべきではない。さらされているという状態、待機中であるという状態において、冷汗を流す事態は既に始まっているのであり、こうした事態を生みつづけているという意味において、その暴力は既に作動している。また冷汗は、待機中の暴力に身をさらしながら自らを提示しつづける遡行的なプロセスがいつも存在しているということを、暗示しているのである。」

（15）エドワード・W・サイード、山形和美・小林昌夫訳『始まりの現象』（法政大学出版局、一九九二年二月）

（16）この戸籍調査によるまで、十二滝町には名前は存在しなかった。十二滝町という名前は、開拓民が村に名前をつけることを拒否したため、役人によってつけられたものである。

（17）ここでいうノスタルジーとは、「あの頃はいまよりも物事がうまくいった、もっと美しかった・もっと健康だった・もっと幸福だった・もっと上品だった・もっと刺激があったと信じこんでいる主観的な状態」である「素朴なノスタルジア」であるといえる。（F・デーヴィス、間場・荻野・細辻訳『ノスタルジアの社会学』（世界思想社、一九九〇年三月））

（18）農務省農務局『本邦内地ニ於ケル緬羊事情』（一九一九年八月）

（19）川端俊一郎「明治初期の牧羊業と羊毛価格支持政策」（『北海学園大学　経済論集』一九八四年一月）

（20）「男爵大倉喜八郎談話「大久保公と毛織事業」」（日本史籍協会編『大久保利通文書九』東京大学出版会、一九六九年十一月）

（21）満州移民と村上春樹の関係については、拙論「『ねじまき鳥クロニクル』における「忘却の穴」をめぐって」（『立命館文学』二〇〇四年三月）参照

であった。

(22)「都市小説の成立と展開」(「海」一九八二年五月)

(23) 実際に日本で「緬羊増殖百万頭計画」が掲げられたのは、第一次世界大戦後の羊毛輸入差し止め問題の時である。それが失敗に帰した後も、満州事変を機に大陸での羊毛生産計画は実施され、一九三六年には「羊毛自給施設奨励計画」、一九三八年には「羊毛生産力拡充計画」が発表されている。満州事変以降の満州における羊毛生産に関する書物として、田村一郎『羊毛の需給と満州緬羊の将来』(栗田書店、一九三四年五月)、鎌田澤一郎『羊』(大阪屋號書店、一九三四年七月)、『満州の牧羊』(日本学術振興会、一九三六年十月)、井口賢三『満州国に於ける畜牛と緬羊』(北海道帝国大学満蒙研究会、一九三七年十月の講習より)が挙げられる。

(24) 日本緬羊協会『めん羊・山羊技術ガイドブック』(一九九六年十二月)

(25) 柄谷行人「村上春樹の風景」(『定本　柄谷行人集第5巻』(岩波書店、二〇〇四年七月))

(26) 柄谷行人「近代日本の言説空間」(同右)

(27) 児玉誉士夫は、一九一一年福島県生まれ。国粋主義運動に傾倒し、戦中は上海で海軍の嘱託として莫大な資金を得る。戦後はA級戦犯で入獄するも、釈放後は政財界の舞台裏で活躍する。作品の舞台となる一九七八年当時、ロッキード事件により起訴されているが、病気で療養中

(28) 坪井秀人「プログラムされた物語―『羊をめぐる冒険』」(「國文学」一九九八年二月臨時増刊号)

(29) 津村喬「戦後日本の地下帝国」(「現代の眼」一九七七年三月)